

# 1 人口減少社会における地域づくりの視点と手法 —典型としての過疎地域での取り組み—

山形大学名誉教授  
大川 健嗣 氏



皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました大川でございます。

本日のタイトルはここにありますように「人口減少社会における地域づくりの視点と手法」です。というのは、一昨年、私が河北新報社さんから「地域づくり論」という本を出しました。私の参考文献の一番最後に出ているかと思

います。詳しくはそちらの方もごらんいただければありがたいと思いますが、中でも私が専門にして、あるいは研究

させていただいて、あるいは地域の皆さんとのコラボレーションで仕事をしてきたのは、中山間地域で、しかも条件不利地域ともいわれている過疎地域であります。40年にかかわる

つき合いをし、調査をさせてもらい、かつ地域づくりにかかわっています。そこで、これから申し上げるような研究とともに地域づくりに間接的、あるいは直接かかわったことをお話をさせていただこうかと思っております。

## I グローバル化時代に考慮すべきこと

### 1. 予測不可能だったアメリカ発の世界的経済危機

それでは、早速1番目に入っていきたいと思えます。

ここではグローバル化時代に考慮すべきことというのをお話しますが、1の「予測不可能

#### 1. 予測不可能だったアメリカ発の世界的経済危機

- ・これまでは米ドル中心の国際経済環境だった
- ・サブプライムローン問題発覚(2007年夏) → それを引き金となりアメリカ大手証券のリーマン・ブラザーズ破綻(2008年9月) → 世界金融危機(世界恐慌か?)
- ・アメリカに集中していた投機マネー → 石油・穀物投機に転換したため → 産油国を勢いづけ、石油の値上げ → 世界規模での物価高を引き起こした
- ・世界穀物市場構造にも激変が起きた → 脱化石燃料政策が穀物からエタノール製造法を考案 → とうもろこし等の穀物価格の急騰(不足)
- ・世界的珍現象が発生: 途上国の経済成長 → 食生活の欧米化 → 豊かになった人間同士が穀物を奪い合い、かつ人間と動物が奪い合う(世界穀物市場) → 加えて脱化石燃料政策でエタノールに取られ → USAの穀物生産農家は大喜び
- ・景気回復の見通し?

だったアメリカ発の世界的経済危機」というところは、今となってはこれはもう先刻ご承知のことなので簡単に申し上げます。

ここで注意してもらいたいのは、このところアメリカに集中していた投機マネーが、石油・穀物投機に転換して産油国を勢いづけさせて、石油の値上げをしてコストを高めて、世界的な規模での物価高を引き起こしたとい

うことです。

2 段目、3 段目の中黒のところではありますが、世界穀物市場の構造のところですね。これは面白いことに、エタノールが出てきたためにトウモロコシ価格等の穀物価格が不足によって高騰したということです。

それから、これは私は「世界的な珍現象」と言っているんですけども、途上国が成長して、日本がそうであったように食生活の欧米化が進んでいます。豊かになった人間同士が穀物を奪い合うわけですよ。日本や先進国だけではありません。中国やその他、発展途上国が急速に伸びてきています。それに加えて、人間と動物もエサをめぐる穀物の奪い合いをしているんです。世界穀物市場が非常にややこしくなっています。

それから人口の増加もありますね。加えてエタノールに取られるというので、アメリカの穀物生産農家は大喜びなんですよ。そのことが、ほとんどアメリカの穀物に輸入依存をしてきた、し続けている、し過ぎている日本にとってどうかという大きな問題があるということです。この話はちょっと議論が大変多いですから、パスして次行きましょうか。

## 2. 地球温暖化対策＝低炭素型社会づくりに向けたパラダイムの転換＝産業・社会構造の転換

21 世紀において、この地球温暖化対策、あるいは低炭素型社会づくりというのは、地球上に生息している我々人類にとって、どこの国であってもどこの地域であって最大の問題になります。間違いなく確実に温暖化は進んでいます。

### 2. 地球温暖化対策＝低炭素型社会づくりに向けたパラダイムの転換＝産業・社会構造の転換

- ・温暖化による地球環境の激変
- ・自然治癒能力を凌駕するほどのCO2排出量
- ・産業革命的技術変革の時代の到来を期待
- ・代替エネルギー（バイオマス等）の開発と実用化
- ・農業・水産業への影響が始まっている
- ・脱温暖化対策として森林の利活用・保全・育成と磯焼け対策
- ・低炭素型地域社会づくりこそが喫緊の課題

これまでのアメリカ等先進国中心にやってきた経済発展、化石燃料依存型の経済発展はCO<sub>2</sub>を大量に排出し続けており、今、それに発展途上国が追いついてきています。今までは自然治癒能力で処理できていたCO<sub>2</sub>が、もはや自然治癒能力では処理できない量になってきているということなんです。ですから、山村であろうと都市であろうと、東北であらうと東京であらうと真剣になって考えなければなりません。

そういう意味では、19 世紀あるいは 18 世紀の中ごろから興ったあの産業革命的な技術変革の時代に到来しているということでもありますので、技術屋さんの技術開発に大いに期待しているところでもあります。

それから、バイオマス等、代替エネルギーの開発です。これは今後非常に急がれるところでもあります。農林水産業への影響ももちろん出ています。

私どもは魚をよく食べている割にはこの問題にちょっと無関心、無神経過ぎますね。後ほど申し上げますが、我々が今やっている 5 年間の大プロジェクトがあるんですけど、そこで専門家の話を聞くと、日本中で沿岸の磯焼けが非常にひどいものになっているそうです。それ

で、沿岸漁業がいわば危機的状態に入っている。山もさることながら、これを何とかしなきゃいけません。

### 3. 変わる日本の位置づけ

日本の国は1960年以降高度成長し、大変だ大変だと言いながらも、皆がそこそこ、いい生活を享受してきたと思います。ところがそれが大きく変わりそうです。

#### 3. 変わる日本の位置づけ

- ・ 20世紀後半のアメリカ・日本・ドイツの三極時代は終焉
- ・ 巨大国アメリカの失速 (2007年夏、サブプライムローン問題発覚)
- ・ 中国・インドを軸にロシア・ブラジル等BRICs諸国の台頭と成長
- ・ EUの結束の強化 (25ヶ国)
- ・ 世界経済の基軸が移動しつつある？
- ・ 日本はどこへ？ どう生き延びるか？
- ・ 日本の特色と構造的欠陥：食料を含む世界最大の資源輸入大国 → 付加価値添加型・輸出依存型産業構造  
→ これは今後も持続可能か → 如何にして外需依存型から → 内需中心の経済構造に転換するか？

20世紀の後半からアメリカ・日本・ドイツという三極構図はもう終わりだというこの辺は常識ですよ。

米中央情報局 (CIA) など組織する国家情報会議 (NIC) が出した「2025年までの世界の展望」という非常におもしろい英文の論文が出ています。さすがアメリカだと思ったのは、アメリカの体力が全体的にかなり

落ちていくということをアメリカの研究機関がはっきり言っているんです。日本であれば、そういうリサーチ結果を国民に知らせるかちょっと疑問です。

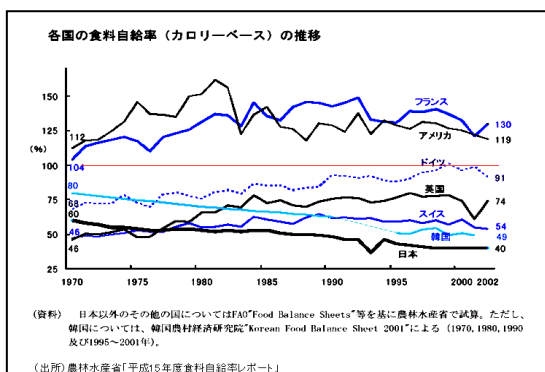
それから、中国・インド・ロシア・ブラジル、いわゆる BRICs のこの「s」は、複数という意味での s なんですが、今この s を大文字にして南アフリカを表したらどうだという話が出ています。そんな議論も出ているくらい、この発展途上国が急速に、かつての日本に追いつくような形で伸びてきており、それゆえに CO<sub>2</sub> を膨大に出し始めているという問題があります。

それから、EUの結束が非常に強い。したがって、先ほどの NIC が言うには、世界経済の基軸が移動しつつあり、アメリカ・日本・ドイツの三極から、30年ごろからは中国・インドが非常に伸びてくるんじゃないかと注目をしているようです。日本はどこへ行くんだろ、どうやって生き延びるんだという国家的な課題もあります。

一番最後は日本の経済、日本の国家のつくりの特色であります。日本の特色と構造的欠陥は、食料を含む世界最大の資源輸入国だということです。日本が生き延びるため、あるいは経済力を高めるために、付加価値添加型で輸出依存型の産業構造でずっと引っ張ってききましたから、将来もこれでいけるのかという問題なんですね。いかにして外需依存型から内需中心の経済構造に転換するか、というのはよくいわれていることですが、具体的にどういって転換をしていくかというのは非常に難しいといわれています。

この間テレビを見ていておもしろいと思ったのは、たしか東京の証券株式会社の社長さんだったと思いますが、この内需を日本の国内だけでどうにかするのはちょっと無理じゃないかという話をしていたのです。世界の大市场がアメリカやドイツなどからアジアにシフトしていくのはもうはっきりしている、もう既にそうなっていると。だから、東南アジア、中国を含めたアジア、南アジア、それをも日本にとっての内需と考えて、協調と戦略を展開して

いってはどうなんだと。そういう視点がないともう日本国内だけの内需戦略というのはなかなか難しいんじゃないかという言い方をしていました。私は、ちょっと不遜だけれども、これはおもしろいと思っています。



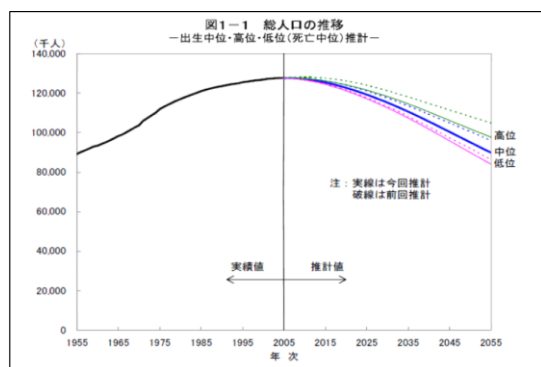
これはよく見られるものですが、日本の食料自給率のグラフです。日本はいちずに下降し続けています。100%以上のところは世界の中でフランスとアメリカだけです、アメリカが1984年前後からやや横ばいしないし漸減傾向なのに対して、フランスは伸びているんです。アメリカより、むしろフランスが今世界最大の農産物輸出国になりかけているという

ことが分かると思います。

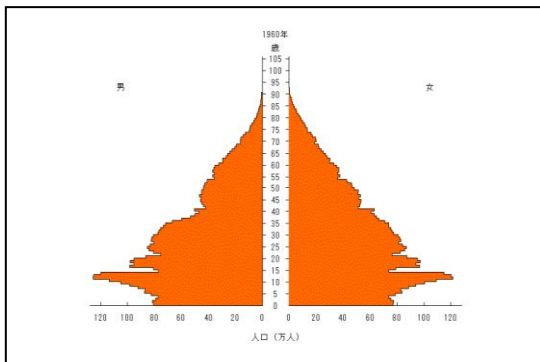
それから、日本と同じ工業依存型高度成長を続けてきたドイツの自給率が100%に近づいているということを見ていただきたい。ドイツが国内農業食料生産に力を入れて取り組んでいることがはっきりわかります。ただし、これはカロリー計算ですから、作物別にするとかかなり差があります。ドイツは北緯が高いので果物などは無理です。その他の稼げるもので稼いでいるから100%になっています。

それから、イギリスもかつて工業依存型の国でありましたが、そこそこの70%台の自給率に戻ってきています。これは、イギリスは第一次世界大戦後、それから19世紀の後半から工業優先型にして、採算性の合わない農業とかは全部植民地の仕事にしてしまったんです。そして農業というものを余り顧みなかった。それゆえ、実は大型の小麦生産農家とか畜産農家というのは残っているんです。日本が抱えているような小農民問題、いわゆる農業問題、零細農業問題、これはイギリスにはありません。ここは非常におもしろいところです。

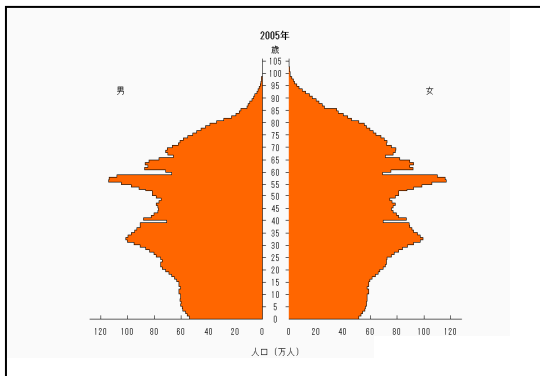
それから、スイスは耕地がないのにここまでよく頑張っていると思います。韓国もちょっと下がりぎみ、日本はかなり低迷。さて、これをどうするんだろうかと。世界の経済、食料事情が変わってきているのにとおもいます。



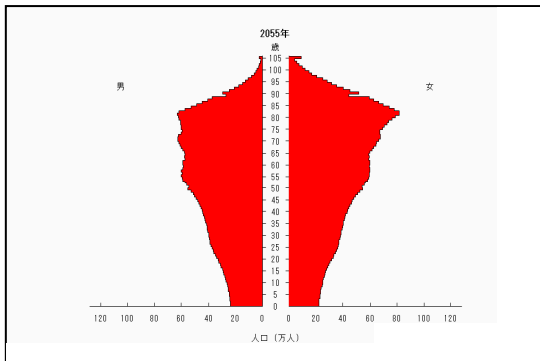
それからこれは国立社会保障・人口問題研究所の推計値です。2005年で大体1億2,000万台ですが、三つある推計の中位ぐらいで考えたとすると、2055年、つまり半世紀後には1955年の総人口に逆戻り、ちょっと高いかという程度になる。このままの人口対策でいく限りははっきりしているので、少子化対策をかなり本気に考えないと駄目だと思います。



これは1930年、これが一番最初です。これは第1次団塊の世代、これがどんどん富士山型から欠けてきて少子化になってとはっきりしています。それが45年等々になると、その少子化が出てきて団塊の世代も消えていきますから、このまま行きますと本当に高齢化社会になるんですよ。



このような人口ピラミッドのデータというのは非常に重要ですが、このやり方は県レベルのものだと問題がビビッドに出てこないんです。市町村レベル、さらには昭和の合併ころの旧村レベル、あるいは集落レベルの5歳階級別人口ピラミッドというのをきちんとつくってください。それを30年ぐらいのスパンからずっと調べてください。そして、さらに推計値を出してください。



これは私も集落調査のときやるんですけども、問題は0～5歳のエリアです。どんどん減っています。町村や集落になるとこの辺がゼロになってきます。それから、この辺が非常に細ってきます。そして高齢者の部分が多くなります。そうすると、このまま行くと何十年後にはこの集落は消えるというのがわかります。やはりそこを恐れずに、行政研究

所その他にかかわる人たちは大胆に組み込んでいかないと。今何をすべきなのかということを考えていかなければいけないだろうと私は思います。

人口ピラミッド研究はぜひやっていただきたいと思います。これは明らかに形が変わってきますよ。これは少子高齢化、しかも女性の部分が多いですね。この時代はもう50代以下層というのがこんなに細ってくるんですね。将来は高齢者の方が圧倒的に割合が多くなる。6割ぐらいになるんじゃないでしょうか。こういうときの年金問題とか社会福祉問題、病院対策、福祉行政は、問題の発生が今から見えていますから、かなり本格的に取り組んでおかないといけないということになります。

## II 農山村社会の存続条件：時代を読む

### 1. 国策としての農業・農村政策と課題

CHAPTER IIは「農山村社会の存続条件：時代を読む」といたしました。人口問題にもか

## 1. 国策としての農業・農村政策と課題

- ・ 平坦部稲作地帯を中心に集落内の話し合い（プランづくり）をとおして、認定農家または農業法人等へ農地の集積を図ろうとしている（水田経営所得安定対策）。
- ・ 石破農水相は減反選択制の導入により危機回避を図る→減収には所得補償をセット化を検討中→米価下落の懸念もあり、JA等は反対
- ・ 問題は米主体の第1種・第2種兼業農家の行方→米以外の作目への転換 or 農産物加工 or 他産業との組み合わせ→零細農家を離農させ農地集積→ただし離村させないためにはどうする→安定兼業が持続すれば可能→農村部への企業進出は困難（グローバル化時代）→農村内部での内発型起業（地域観光を含む）を図る以外に途はない⇒現状は不安定就労で食い繋いでいる→これでは担い手は確保できないのでは⇒ではどうする！

なり詳しいコメントがあるのですが、時間がありませんので先に進ませていただきたいと思います。

農山村社会の存続条件。これは言葉としてわかるけれどもどうすればいいのかというのが、皆さんが日ごろ頭を抱えておられる課題だと思います。国策としての農業・農村政策というのは、水田経営の経営安定、所得安定

対策なるものが出て間もないんですが、もう既に揺らぎ始めています。平坦部稲作地帯を中心に、集落内の話し合いをして集落営農をつくり進めてきています。認定農家あるいは農業法人をつくらせていこうではないかという政策なのですが、これにも農業生産者及びJA等農業団体は、推進主体でもあるんですけれども、いろんな問題を抱えているものですから何かいまは進みにくい。それが現状だと思います。

そこに突然、石破農水相が基本的には機械的減反はやめたいと言い出しました。減反の選択制を導入して、食糧危機を回避すると。減収した分には所得補てんをして補償し、それとセットで選択制を導入しよう。これに対してJA等は、量産が進んで一層米価が下落する懸念もあるのではないかと反対をしています。しかし、もう既に委員会ができておまして、国策としてはそういった方向に動き始めています。農水相の話だと、21年度中にははっきりさせて、22年には予算化したいというふうなことを言っていますから、これはかなり急テンポで進み始めているように思います。

うまくいくかどうかについては結構問題があるかもしれません。しかし、このままでは何ともしようがないという考慮の末だというふうに思いますし、我々の立場からすると、動きを見ながら行く以外ないかと思っています。

それから、この農山村問題の存続条件で、これが一つ非常に重要ですので、後ほどよくご検討いただきたいと思いますと思うんです。

日本の農業は、その県ごと、地域ごとによって大分違います。秋田県は米依存度が高いですね。東隣の岩手県は生産額としてはもう完全に畜産県。青森はリンゴなどのウエートも高い。山形県は庄内を除いてやはり複合農業地帯、米プラスアルファ型になっています。

そこで、農地をはがして認定農家や農業法人に集積し、米づくりは規模拡大を図って、アメリカともそこそこ戦えるようなところまで持っていこうというのが国策のねらいです。あるいは農産加工して付加価値をつけたり、他産業との組み合わせを考えていこうということではありますが、この過疎問題、人口減少問題と非常にかかわっているのはここです。零細農家を離農させるのはいいんです。農業をやめてもらって大規模農家に集積するのはいいんですけども、離村させないようにするにはどうするかという問題なんです。離村しているから過疎になるんです。離村させないようにするための手法は何かということで、みんな苦勞しているんです。村落住民として居続けるということは、彼らが生活できるということです。年



金だけじゃなくて。

私が調査でかかわっている山形県西村山郡西川町というところがあります。ここは地域づくりで全国的にも高い評価を受けているところですが、ここでもやはり問題を抱えています。

1970年代から80年代真ん中くらいまで一時期、短期間ですが、米プラス安定兼業というのが定着したんです。私はこれが世代ごとにリサイクルするのであればいいかと思っていました。ところが、進出していた企業がどんどん東南アジアへ行ってしまう、グローバル化の中でそれは消えていきました。したがって、持続すれば可能というのは、もし可能であればという話になってしまった。

農村部への企業誘致をすればいいじゃないかという話がありますが、企業誘致だけを言い続ける首長さんというのは、僕に言わせると非常に無能な人ですよ。企業進出ができる場所というのは限られているんです。そう簡単にどこでもやれるはずはないんです。グローバル化ということを考えれば、今や日本の地方といえども低賃金ではありませんから。

そういう点では、後ほど例を出しますが、地域観光などを含む農村内部での内発型の企業を興す以外に方法はあります。他力本願ではもう無理ですし、それでは首長さん及び行政の不在というか、役割の放棄に近いというふうに思っています。

かなり不安定な就労で、道路もよくなりマイカー時代になって何とか村に残り兼業収入を得ながら村や家を守っているというのが村に残っている人たちの現状です。私の言っている「村」とは昭和の合併の旧村単位のことです。こういう状況でどこでも問題になっているのは、こんな状況で担い手は確保できるかという問題なんです。これは非常に危ういです。

## 2. 循環型・低炭素型社会づくりの基本コンセプト

それで、先ほど来、その次の新しい問題になってくるということを申し上げたのですが、この循環型・低炭素型社会づくり、これは大都市の問題で農村は関係ないだろうということではないのです。それぞれのやり方で全部がかかわらなければいけないんです。そのための基本コンセプトというのを少し議論しておきたいと思います。

山村では、いわば都市型の資本主義経済というものにどっぷりつかった場合、その地域は崩壊します。つまり都市の人間にとって魅力を失うということです。大都市の周辺であるとか、中には可能などころもあるでしょうが、一般的にはこれをやると村はつぶれます。です

### 2. 循環型・低炭素型社会づくりの基本コンセプト

- ・山村では都市型の資本主義経済どっぷり型は地域を滅ぼす
- ・その枠内にいながら部分的に利用しつつ地域個性を出すにはどうすべきか？**難しいがここがポイント**
- ・テーマパーク型は不可能だし、必然的に自然破壊型になる
- ・巻機朝日国立公園・月山・出羽三山の豊かな自然（ぶな）の保全と西川ならではの営みそのものが都市生活者に癒えを与え、さらには世界中が注視する普遍性と地域個性を同時発信できる地域づくり
- ⇒ そのためには、基本的に循環型・低炭素型地域社会形成以外に途はない⇒ CO2を極力排出しない地域づくり⇒ 自然にリピーターが増えるムラづくり⇒ 「エコミュゼ」の形成

から、理論的にはその現代資本主義の枠内にいながら、部分的に利用しつつ地域個性を出すにはどうしたらいいか考えなければなりません。これは非常に難しいのですが、これしか手がありませんのでやらなければなりません。

そして、非常に大事なことは地域住民とよく話し合うことです。たまに、企画のセクショ

ンにいるにもかかわらず対象の山村地域を歩いたことがないという自治体職員に会いますが、「お前さんたちあほうか」と言ってるんです。実体も見ないで絵は描けるはずはありません。

結局、この月山のふもとの西川町は、これを売りにしていかなければならない、こういう形の地域づくりをしていかなければいけないというのがコンセプトです。西川町は磐梯朝日国立公園の一部です。そして、朝日連峰や月山、湯殿山、羽黒山の出羽三山があります。この周辺には非常に豊かなブナの原生林及び二次林があります。これをどのようにして保全しながら、西川ならではの営みそのものが都市生活者にいやしを与えて、さらには世界中が注目する普遍性と地域個性を同時に発信できる地域づくりをしていくかということです。あそここの地域の場合は、それに集約されていると思います。

都市生活者にいやしを与える。これは可能だと私は思います。ブナの持つ威力というのはすさまじいものです。皆さん、ゴールデンウィークの頃のブナの新緑って見たことありますか。私は宮城県育ちなので、山形大学に赴任してから初めてブナの新緑を見ました。遠目でも見ましたし、近くにも行きました。こんなきれいなものがこの世の中にあるのかというふうに私は思いました。私のこの地域づくりの本の中で、「この美しさを見ずして人間は彼岸に渡ってはならない」と書いておきましたが、それほど貴重なものです。私は新緑のブナを見ると、3カ月から4カ月間分のストレスが解消します。それほど効果があります。皆さんもぜひこういう体験を家族とともになさるといいと思います。特に小さいお子さんは連れていった方がいいですね。子供のうちからふるさとのブナ及び自然というものをインプットさせることです。そうすると、いったん進学や就職で出ていっても、その後人生の岐路に立ったときに、あれがあるから戻るということになるかもしれません。秋田もたくさんブナ及び自然の豊かさをたくさん抱えています。賦存資源がいっぱいありますね。

山村が生き延びるためには、基本的には循環型の低炭素型地域社会形成以外に方法はないと私は思います。だから、CO<sub>2</sub>を極力出さない地域づくりをしていく必要があるんです。

今、西川町の大井沢地域を我々のプロジェクトで調査しています。もう100戸300人しかいないんですよ。その100戸のエネルギー調査をしたところ、未だに薪ストーブを使っている家が38軒もあったんです。これはびっくりです。4割弱が未だに薪ストーブを使っている。薪ストーブのあたたかさというのは全然あたたかみの質が違いますね。ふわっとこうあたたかいのが出てくるんですよ、それは。

ともあれ、そういうようなことをしたり、炭づくりをしたり。西川町は炭の村だったんですが、今やもう日稼ぎの方が忙しくなっちゃって、炭づくりをやっている人はいないんです。これもまたちょっと困ったもので、どうしようかと今考えています。

そういうことを地道に続けていけば自然にリピーターが増えてくるであろうと。最終的にはその大井沢に「エコミュゼ」、これはフランス語で、英語ではエコミュージアムですね。大井沢村全部をミュージアムにする大井沢エコミュゼ構想というものを考えております。



## 2. (続) 循環型・低炭素型社会づくりの基本コンセプト

- ・日常的な都市型賑わいでは他人(ひと)は来なくなる
- ・どのような生業・営みが理想か?
- ・後継者がいずれ住み着く条件とはどんなこと?
- ・インターネット・ネットワークは早急に整備すべし ⇒ ライフスタイルが変わる ⇒ 次世代が住みやすくなる
- ・自然体験・農業体験・山村体験 ⇒ 体験型学習の拠点づくり(山形県西川町、かもしか学園)
- ・「計量不能な価値」を評価できる確固たる生活哲学の確立
- ・いま以上に大人が集まるには、地域全体に高い精神性が求められるのでは
- ・JST「東北の風土に根ざした地域分散型エネルギー社会の実現」プロジェクト始まる

日常的な都市型にぎわいの村をつくったのでは他人(ひと)、特に都市の人間は来ません。どのような生業や営みが理想なのかということを考えていくときに、所得絶対額が多い都市と比較をして、都市の所得と同じにならないと発想を持つこと自体がおかしいんです。山村では自給度が高いですから、別に都市と同じ所得でなくたって一向に構わ

ないんです。それが貧困だとか貧乏だとかというふうに考えることがおかしいんです。そういう考え方はやはり捨てたほうがいいです。ただ極貧の状態では困るというだけのことだと私は思います。

では、後継者が住みつく条件とは何なのでしょう。ここは非常に大事なところ。今は、残っているおじいちゃん、おばあちゃんが頑張っているんです。後継者が残っている村があるとすればそれはラッキーです。あるいは親御さんが大変丁寧にお子さんを育てたということです。ほとんどは、家族の教育も親の教育も学校教育も、いい高等学校に行って、いい大学入って、いい会社に就職するという高度成長期以来の出世志向型の価値観がいまだにあるんじゃないかと思います。そういった人もいなければ日本の国は成り立ちませんが、村を守る人もそれと同じぐらい重要だということはどうやって認識してもらうか、そしてそこに定着してもらうかということです。そこで住み続ける意義をどうやって認識してもらうかということですよ。

それから、今はインターネットが出てきました。西川町でも今年度中に山奥の集落まで全部光ファイバーを引きます。ですから、条件がいいところであればそこにインターネット世代の人たちが来ます。

今、西川町では100軒のうちの10軒がIターン者です。セカンドハウスまで含めると、かなり多くなっています。ただ、これも余り単純に喜べません。Iターンで来る人のほとんどが都市で働いただけ働いてお金をためてリタイアした人たちだから、村づくりのためにはあまり体を動かしてくれない人が多いんです。このままにしておいてくれというのが多いんです。その人たちの調整が結構難しいです。けれども、いずれにしてもそれは新しい流れです。

それで今、西川では、自然体験・農業体験・山村体験型の体験型学習拠点づくりというのをやっています。総務省、文科省、農水省の3省が合同で、小学生の長期宿泊体験活動を推進する取り組みをしまして、その受け皿にもなっています。東北地域はやはり受け皿にならなければいけないんです。年間で小中学生を中心に大体2,000人から2,500人来ます。西川町はそれだけの人数を受け入れる力を持っています。ですからそこに2,000万以上のお金が落ちるんです。何もしなければゼロです。動いているから2,000万円入っているんです。

「計量不能な価値」という、聞きなれない言葉が出てきましたね。これを評価できる確固たる生活哲学の確立については、また後ほど言いましょう。

山村で生き生きと生活している人たちを見ると、この「計量不能な価値」というものを感じ取り自覚していることが分かります。計量不能な価値というのは、わかりやすく言うと日本銀行券でははかれないという意味です。例えば、ブナの新緑の美しさなんていうのはお金でははかれませんし、無理にはかる必要もないと思います。

### 3. 東北の風土に根ざした地域分散型エネルギー社会の実現

この「東北の風土に根ざした地域分散型エネルギー社会の実現」というのが、先ほどちょっとお話ししました研究開発プロジェクトです。東北大学の<sup>もろずみ</sup>両角教授を中心に、去年の後半から5年をかけて行っています。

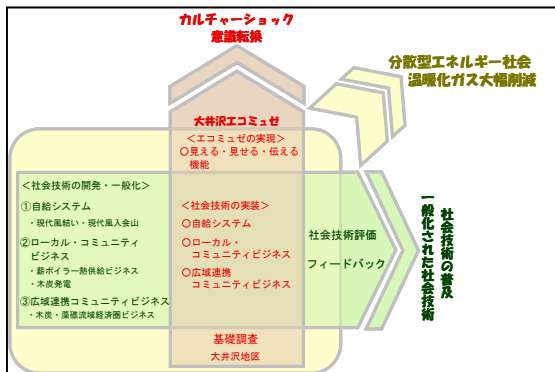
**研究開発プロジェクト (2008~2013年)**  
**「東北の風土に根ざした地域分散型エネルギー社会の実現」**  
 (研究代表: 両角和夫東北大学大学院農学研究所教授)

**研究開発目標**  
 本プロジェクトでは、地域に賦存する様々な再生可能エネルギーを地域住民の個々の活動およびコミュニティ活動を含めて利用する仕組みを、分散型エネルギー社会を実現・普及するための社会技術として研究開発する。さらに、実在する地域社会にその技術を実装し、当該地域を分散型エネルギー社会のモデル地区(エコムゼ)として実現する。本プロジェクトの具体的研究開発目標は下記4点である。

1. 木質バイオマスエネルギーを自給する仕組みとして、川崎町での活動を先進事例として取り上げ、機能と効果の分析や社会制度上の課題の検討を行い、一般化された社会技術として開発する。
2. エネルギーを地域内で供給する仕組みとしてのコミュニティビジネスに関し、川崎町での薪ボイラーによる熱供給の社会実験、気仙地域での木炭発電の試みを取り上げ、機能と効果の分析や、社会制度上の課題の検討を行い、一般化された社会技術として開発する(1,2)。
3. エネルギー・資源を地域間で融通し、付加価値を高める仕組みとしてのコミュニティビジネスに関し、気仙地域の兼業横断型の藻礁実証実験を取り上げ、環境効果・経済効果の分析や社会制度上の課題の検討を行い、複数の地域をつなぐ広域連携コミュニティビジネスを一般化された社会技術として開発する(1,2)。
4. 山形県西川町大井沢地区に上記1~3で研究開発した社会技術を実装し、それによって実現されるエネルギー分散型の持続的な生活様式をエコムゼとして実現する。

本プロジェクトでは、地域に賦存するさまざまな再生可能エネルギーを地域住民の個々の活動及びコミュニティ活動を含めて利用する仕組みを、分散型のエネルギー社会を実現・普及するための社会技術として研究開発しています。

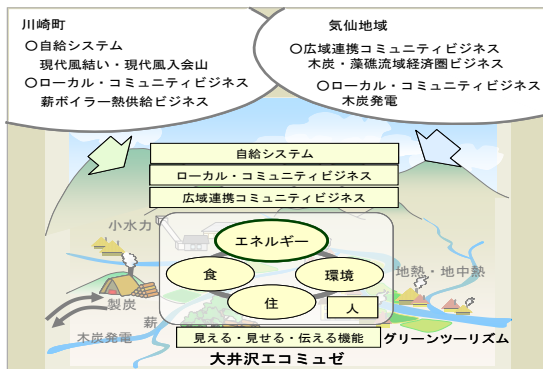
我々のチームでは、三つのフィールドがあります。一つは仙台市の隣の川崎町です。ここでは、仙台市民と一緒に里山を利用しながら、薪ストーブの会というのがあります。今度、400万ぐらいかけて大きな薪ボイラーを保育所のすぐそばに入れ、実験をやろうとしています。



それから、気仙地域の陸前高田市です。生田地区で炭焼きをやっています。ここはなかなかいいところです。もうちょっと手を入れると完璧にエコムゼになります。そして、ここはもともと炭焼き村ですから、炭を焼いて発電させて炭の車を動かしています。駅内ではそれを公共交通手段として使おうとしています。

それと、おもしろいのは磯焼けの問題です。磯焼けがありますので、藻礁実験というのをしています。山側で炭を焼き、中腹の畜産農家の牛ふん等をコンクリートの重しをつけて栄養価のある藻礁をはげた沿岸に埋め込んで、昆布、ワカメを育てて、そこに魚の営巣地であるとかウニの生産増加につなげようとしているんです。遠大な仕事です。しかし、これは岩手県の広田湾ではもう実験済みです。この経済効果等については、今後考えていきます。

それから、山形県西川町の大井沢地区です。最終年度の前の年ぐらいにここにこれらの実験、社会技術を実装します。実装というのは入れるということです。大井沢に入れることによって、何とかしてエネルギー分散型のエコムゼをつくりたいと思っています。



それから、これは大井沢のエコミュージゼのおおまかな構想です。川崎町ではこういった薪ストーブをつくっていますから、お互いに助け合っています。現代風の結びです。現代風の入会山というものをつくり、薪を切り出し、薪ストーブにしてCO<sub>2</sub>削減に努力をしています。

将来的には、こういうものを大井沢に入れながら、食、住、人、環境、エネルギーというものをうまくその地域の中で地域内自給、場合によっては電力も外に売ると。それこそ東北電力に売られるかもしれません。買ってもらうように頼まなければいけません。ともあれ、そういうことを通して、見える形で、見せる形で、伝える機能を持った大井沢エコミュージゼをつくりたいと思っています。

### III 地域づくりの視点と手法

#### 1. 地域づくりの視点：ベクトルの見分けがポイント

最後の三つ目のポイントであります。まさに地域づくりの視点と手法です。ここでまず一番目に申し上げたいのは、地域づくりの視点です。見方です。何でもかんでもやればいってもものではありません。地域住民を混乱させるだけです。だから、やるときはしっかりした視点でアプローチしなければなりません。地域住民を説得しなければいけない、あるいは理解してもらわなければいけません。実際に地域をつくっていくのは地域住民ですから。私なんぞがいくらほえても、空回りになることがしょっちゅうあります。じっくり酒を飲みながら話をするということも大事なことです。

ここでは一言で言うとベクトルの見分けがポイントです。どっちの方向に世の中は動こう

#### 1. 地域づくりの視点：ベクトルの見分けがポイント

- ・時代はどの方向に向かっているのか、の判断が重要 → 食料・環境・水
- ・近年、行き過ぎた国際分業の弊害が露呈し → 再び**農業・農村の健全な発展こそが国の基となる時代に回歸**しつつある。
- ・農産物、とりわけ食料は新鮮で安全で旨くなければ商品価値がない。農産物はもともと「地域商品」であり、遠距離輸送は不適なもの。その意味では、民宿等での食材は可能な限り地場産品であるべき。そこに説得力と会話の種が芽生える。 → 他人(ひと)を惹き付ける。地域観光。
- ・低炭素型地域社会づくりは、化石燃料以外の地域エネルギーを多面的・多角的に活用し、環境保全型・循環型の農業はじめ、CB(コミュニティ・ビジネス)＝小規模事業所を起こす。その可能性を徹底的に探し、実行する。
- ・PDCA(Plan・Do・Check・Action)を繰り返す。「**こだわり**」の視点を**持つ**

としているのかということをはっきりととらえるということです。そのためには、皆さんの立場では、まず正確な豊富な情報を収集することです。そして分析能力を高めることです。そのためには議論することが一番いいです。チーム内で激論をすることです。偉い人だけがこうやると言い、あとが「はい、そうですか」と言っても、それは意味がありません。

そういう議論というのは上下関係がないから。いいアイデアはいいアイデアなんです。それを評価していただければいいと思います。

次は「時代はどの方向に向かっているか、の判断が重要」のここです。食料と環境、それから水が重要です。特に水が世界的に重要な資源、要素になります。水を豊かに持っている地域、これが将来勝ち組になります。水をつくるためには森を守らなければいけません。

CO<sub>2</sub>削減をしなければいけない。これがポイントです。食料問題、環境問題、特に水問題です。

それから、行き過ぎた国際分業というのはやはり問題です。そして、すべてアメリカナイズすることも問題です。今、考えてみたら、最初の方で申し上げたように、頼りのアメリカがあればいいとは思いませんでした。いかに貨幣至上主義の資本主義であったかということが非常によくわかる。そこを割と冷ややかに見ているのがヨーロッパです。ヨーロッパの方はアメリカのやり方をやはりちょっと一歩引いて見えています。経済成長率は低いかもしれないけれども、確実です。

「再び農業・農村の健全な発展こそが国の基となる時代に回帰しつつある」と書きましたが、これはハイテク産業とか近代的な工業主義というものを排他的に批判しているのではないんです。しかし、今まであまりにこれを無視してきたがゆえに、地域に後継ぎも残らない状況になっています。

農産物とりわけ食料は新鮮でうまくなければ商品価値がありません。もともと農産物は「地域商品」で、遠距離輸送には向いていないんです。これをきっちりとらえることです。これを逸脱するから添加物が出てくるんです。だから、大井沢でも民宿なんかはできるだけ地域でつくった食材を使うことにしています。

それからレジユメの「低炭素型社会づくりは、化石燃料以外の地域エネルギーを多面的・多角的に活用し、環境保全型・循環型の農業……」というところです。このコミュニティ・ビジネス（CB）、小規模事業所を、その地域の特性や地域資源をうまく活かしてどのような形で立ち上げるか、何人雇われるようにさせるかというその仕組みです。

このPDCA（Plan-Do-Check-Action）はいいですね。私の地域づくりで非常に大事にしているのは、この「こだわり」の視点です。こだわるということが大事です。こだわる価値のあるものをまず見つけることが大事です。そして、あちこち見ないでそれに集中するんです。

## 2. 地域づくりの手法

### (1) 産業論的アプローチ

今度は少し具体的なお話をします。地域づくりの手法という点ではいろいろあります。インフラの整備は当然として、まずは食えるための産業おこしが大事です。あるいは保全、保持、継続というのも大事です。それから歴史的な文化的な資源が豊かなところはそれを中心にやればいいし、自然だけは、資源では他地域には負けないというところはそれを活かしていけばいい。それがこれからのポイントです。これからは個々を豊かに持っている

2. 地域づくりの手法（・産業論的アプローチ・歴史的文化的アプローチ・自然的アプローチ・複合的アプローチ・イベント型アプローチ）

#### (1) 産業論的アプローチ

- 地域づくりの基盤 ⇒ 何らかの産業振興が必要である。企業誘致も
- 選択肢のひとつだが頼り過ぎないこと ⇒ 地域資源の発掘調査・
- 分析・整理 ⇒ 地場産業の洗い直し ⇒ アクション（集落及び地域連携、機関との連携、行政との連携等、個人でもよい）。
- 事例：山形県西川町大井沢等での食材・アケビへのこだわり。小規模温泉旅館の高品質サービス（夏の経験・福島高湯）。



地域が、地域づくりが可能になります。何にも無いというならば、イベント型アプローチから始めればいいんです。これは、後で事例を申し上げます。

産業論的なアプローチでは何らかの産業振興、企業誘致も必要だけれども、それに頼り過ぎてはいけません。地域資源の発掘調査・分析・整理。それから地場産業の洗い直し。そして、やはりアクションです。

一言つけ加えておくと、評論家の多すぎる村は地域づくりが進みません。というのは、お互いに相殺し合って結局何もしないからです。そこが民主主義の難しいところですね。でも、それを乗り越えて調整するのがリーダーです。そのリーダー養成というのが非常に大事なんです。

## (2) 歴史的・文化的アプローチ

歴史的・文化的なアプローチというのがあるわけで、日記などの古い生活記録というのは、非常に重要な貴重な資料になります。古い家を解体すると聞いたら、早速行って、解体前に資料は押さえることです。今ほとんどもう新築しちゃってるからなかなか難しいんですけどね。目線を低くするといろんなことが見えてくる。

それから「民家を使った集落ごとの小規模資料館の開設」。これはぜひやってください。うまいものを食べるという旅もいいんです。だけど今、日本人の旅は質が変わり始めています。うまいものがあるってというのは当たり前のことです。だけど次に大事なものは、その地

### (2) 歴史的・文化的アプローチ

○骨董的価値のあるもの ⇒ 古い民家、古い農具、わらびもち関連器具、古代甕、古い食器、日記等古い生活記録等、当時の地域の生活が分かるもの等。 ⇒ 目線を低くすれば、色んなことが発見できるし、見えてくるはず。 ⇒ 民家使った集落ごとの小規模資料館の開設などもよい。

○そこでなければ見られないものにこそ価値がある。

○歴史は宝宝箱 ⇒ そのまま活かすもの、今日的にアレンジするものと両方あるはず。

域でなければ見られない地域の歴史、地域の自然、地域個性のもの、地域住民との生の会話、これがポイントです。どこにでもあるものはどうでもいいんです。そういうのは都市に行けば十分にあるじゃないですか。わざわざ山村に来なければならないもの、これをどうやってつくるかです。

歴史的・文化的なアプローチの仕方もあるわけですが。西川町はそれこそ出羽三山のあったところですから、歴史を持っています。それから何といてもきれいな川や動植物等々、その豊かな自然です。最近では月山の春から秋にかけてのトレッキング、これが非常に多くなりました。それから高山植物のあるところ、あるいはその湿地帯のあるところ、そういうところはぜひ整備して、それが観光

### (2) 歴史的・文化的アプローチ (続)

○時代の流れの中で、特に大井沢は周囲の豊かな自然を資源に、自然及び山村農業の体験学習の拠点となってきた。

○月山の春から秋にかけてのトレッキング。月山の夏スキーをはじめ、豊富な四季の高山植物の花をみる旅。

○山里・大井沢では危機迫る地球環境問題を学び、自然の豊かさを感動を直接肌で感じながらの「体験型学習」が、新しい形の現代的な地域観光のトレンドを形成している。問題は後継者である。

○山形短期大学も、平成20年度から、本格的に科目「地域体験」で総合文化学科1年生全員に体験学習をさせることになり、現在進行中。

○地域にとっては、新たなる内発型の事業(CB)である。

資源として使える、あるいは学習の資源として使えるようにしていただくといいと思います。ですから、西川町では大井沢を中心にして体験学習型のいわば地域観光が定着して

います。

ただ、問題はあります。後継者が必ずしも確保できるかどうか分からないのです。こんなに展望があるのに。ここの古老は「我々は息子を手放すときに、手放し方を失敗した」と言っています。これは、気がついたときにはちょっと遅いというところもあるんです。けれども、今からだってできることはあります。私は血縁じゃなくていいと思っています。赤の他人でもいいと。ただ大事なものは、村の歴史と掟を守ってもらうことです。そうでないと必ずトラブルがおきます。だから大井沢では外来者が定住するときの条件を決めています。

### (3) 自然的アプローチ

ブナ文化圏など、自然も資源になります。西川町大井沢でちょっと欠けているのは木工文化の欠落です。かつてありました。今はこけし工人だけは一人残っています。木があるならば木を使わなきゃいけないです。スイスだとかドイツだとかへ行きますと、山奥では必ずこ

#### (3) 自然的アプローチ

- 雄大な磐梯朝日国立公園・月山とその周辺
- ブナ文化圏（豊かな植生＝山形県立自然博物館、動物＝大井沢自然博物館等）の保全と適度な活用 → 木工文化等の普及
- 本格的な登山のほかに、**一般の人のためのトレッキングルートの整備、森の案内人の養成（塾の立ち上げ）の整備**
- 山菜学の充実・実践。民宿などで地元の食文化を学ぶ。2008年の山短祭で大井沢で学んだ山菜料理を販売、大好評
- 天然記念物（リスト）等自然資源はじつに豊富。
- 21世紀は低炭素型地域社会形成の時代**

の木工文化が豊かに育っています。これはヨーロッパの山村との決定的な違いです。これはやらなければいけません。

一般の人ためのトレッキングルートの整備や森の案内人の養成。この案内人はお金取っていいんですからね。ただし、それだけ勉強しなければいけません。「この木の種類はなんですか」と聞かれて、「さあ、わかんねえな」ではお金は取れません。

#### (4) 複合的アプローチ

- ほとんどの自治体では複数のアプローチが可能である。これが一般的。

#### (4) 複合的アプローチ

一般的には、この複合的なアプローチが可能です。

#### (5) イベント型アプローチ

- どう考えても打つ手がなければ  
→ イベント型アプローチを模索すればよい。
- 大川が関わった体験事例  
事例1：**沖縄県嘉手納町の野間総管塾が始めた総管太鼓**  
事例2：**秋田県羽後町の「羽後牛まつり」**など  
(後者は西馬音内盆踊りという国の重要無形民俗文化財があるのだが)

#### (5) イベント型アプローチ

これはイベント型です。イベント型ではいろいろかかわったんですが、この秋田県では羽後町にかかわりました。それから沖縄県嘉手納町です。米軍基地のある嘉手納町、こことも30年以上のつき合いになります。はじめは地域づくりリーダー養成に呼ばれて通いました。米軍の基地でほとんど取られているし動きがとれないので、彼らの地域づくりは太鼓をたたくことから始まったんです。総管太



鼓といいます。

総管太鼓の総管というのは人名です。この野國総管という人は、琉球の時代、初めて中国から甘藷、サツマイモを導入した人です。沖縄に行ってサツマイモというと怒られますよ。あれは薩摩侍がかっぱらっていったものだと言いますから。あの紫色の紅芋ですね。おいしいですよ。

## (6) 地域資源発掘法

これは時間がないので結論的なことだけですが、地域資源を整理するときに非常に大事なことがあります。地域資源の整備は「大項目方式」ではなく「小項目方式」ですということです。

例えば、東京と西川を教育という点で比べてどっちに軍配が上がるかというと、東京に上

### (6) 地域資源発掘法

地域資源発掘の手法としては「大項目方式」ではなく「小項目方式」を採るべし。

理由は至極明快で、「大項目方式」で、たとえば東京と西川町を比較すれば、ほとんど全てが東京に軍配が上がってしまう。ところが、たとえば「山菜があるか」「岩魚は容易に食べられるか」となると西川に軍配があがる。このように「小項目方式」で比較すると、実に多くの項目で東京にはないものや、優るものが拾い上げられる。これを「切り口」にすればよい。(詳しくは、大川健嗣著『さがす こだわる つくる 地域づくり論—その視点と手法—』河北新報出版センター、2006年、P.226-227を参照。)

がるんです。交通も文化もその他も東京で、何にも西川町が出てこない。それでは地域づくりをやれません。ですから、西川に軍配が上がるようにするためには小項目でやることです。例えば、山菜なんかは東京と西川でどっちと言ったら西川に決まっている。水がおいしいのは西川に決まっている。月山のような眺望やブナも西川に決まっている。そういうのを挙げていくと何百と出てくるんです。それを資源化して戦略化すればいい。

### (7) 「違い」は商品化・交流の原点である

○たとえば、山形など雪国では「雪」は邪魔ものかもしれないが、雪のない地域や国では雪への憧れがある。台湾人観光客は西川町月山の春・夏スキーにやってくる。ウオンの価値下落が気になるが。

○たとえば、沖縄と山形の違い並びに海外との違いを考えれば、「違い」は商品化・交流・交換の原点であるのでビジネスになる。輸出も視野に。

### (7) 「違い」は商品化・交流の原点である

地域づくりに非常に大事なものは「違い」です。「違い」というのは商品化の原点です。交流の原点です。違いがあることは大変いいことです。

### (8) 地域づくりの「鍵」：人材発掘と養成

(1) 山形県「西川町塾」

(2) 沖縄県「かりゆし塾」

(3) 山形県大石田町「寺子屋」

(4) その他(最近のもの：1. 山形県「大石田町活性化推進協議会」、2. 山形県「西川町地域づくり協議会」、共に2008年度開設)

それからもう一つ大事なものは、人材を発掘したり養成することです。1回だけの講演というのは、どんなに感動的でも1週間もちません。すごかったと思っても、日常性の中で消えていきます。そうではなくて、塾型学習、何度も何度も、継続的にやることです。つまり、感動を持続させてアクションにつなげる。そういう格好にすることが大事です。

### 3. 生活哲学（「計量不能な価値」）の確立こそが山村再生の鍵

これは、計量不能な価値のところですね。これは、ひとつじっくり後で読んでみてください。これが勝負じゃないかと私は思っています。

### 4. ハイテクとローテクの調和的共存の時代

あとは、ハイテクとローテクが調和的に共存する方法をつくることです。ローテクを余りに捨て過ぎてきたから、地域内技術力が低下しているんです。地域内技術力が残っているところであれば、地域づくりは必ずできます。より近代的、現代的なものだけに振り回されないことです。

それからIT。こういう時代ですから、うまく使えばいいと思います。

## IV 地域づくりにおける行政と地域の役割

これは、行政と地域の役割であります。このところは、皆さんがその中に入っている方々だから、私は言う必要がないかと思えます。これは後でご覧ください。

### 3. 生活哲学（「計量不能な価値」）の確立こそが山村再生の鍵

- ・価値は日本銀行券（お金）だけではないという認識が重要
- ・四季の豊かな変化、自然美の競演、豊かな食材（山や川の恵みを生かす）、雪と戦い雪を活かす、都市にはない天賦の与件を生かす、思索し創造し → 都市との交流を促進し、  
→ アイデンティティ（Identity）を国内外に発信する
- ・山村には、まさに「計量不能な価値」が豊富にある
- ・山村住民の価値観と意識の転換が期待される

### 4. ハイテクとローテクの調和的共存の時代

- ・近代化の弊害 → ローテク（low technology）を捨て過ぎてきた  
→ **地域内技術力の低下**
- ・復権と復興が必要
- ・IT（高度情報化時代）の到来 → これまで不便だった、であるが故に乱開発を免れてきた山村は → 21世紀こそ「我が時代」 → 動きましょ、ゆっくと確実に → ただし、方向を見誤らないように。

1. 地域（ここでは地区）は、行政依存も適度に利用しつつ、相対的自立の方向を模索すべきである。
2. 地域も独自のグランドデザインを作成する時代である。  
Ex. 大井沢地域づくり委員会「第3次大井沢地域づくり計画」を平成19年に作成、新たな段階に入る。
3. 「西川町地域づくり協議会」のもと「西川町地域づくり検討委員会」が平成20年度から2ヶ年計画で開始され、平成20年10月29日、西川町役場での設立総会で大川が基調講演（国土交通省支援事業）。
4. 西川町では、平成18年度から「西川町地域支援職員派遣事業」を開始。目的は①職員が地区の実態と住民のニーズを掌握する、②行政職員の資質向上を図る、③地区計画作成を支援する、④それらを西川町の総合開発計画推進と連動させる。

#### ・失敗事例

1. 0町の特産物開発：山形県0町のかぶの商品化  
住民が日常食べているままのものを加工しすぎて失敗
2. プラン作成後のフォローアップの失敗、棚上げ状態
3. 活動主体の形成の甘さ、住民主体でないと動かない。
4. JSTプロジェクトの立ち上げの難しさ、難航した受け皿づくり  
重要なのは、日常的な住民との信頼関係の構築である。  
目線が大切である。

あるところで、成功例だけじゃなくて失敗例も話してくれと言われたんです。私あまり失敗してないんでちょっとやりにくかったんですが、山形県のある町の特産物の開発、町の名前を言うと怒られるんですよ。そこに町の名前を冠した〇〇カブというのがあるんだけど、これの漬物の商品化で失敗しちゃったんですよ。

粕漬けにしたんです。赤い、ピンクの濃い色のカブなんです。粕漬けにしちゃったら何ともいえないまずそうな色になっちゃったんです。いずれ、チャンスを見てもう一遍トライ

しようと思っています。私は住民が日常的に食べているそのまんまでいいと思います。浅漬け型なんですけれど、それでいいと思うんですよ。

それから、プラン作成後のフォローアップですね。協力した我々が一番困るのは、棚上げになることです。せっかく立派な報告書を作ったのに、棚上げになっちゃって生かされない。これは腹立ちますね。

それから、住民の主体性。これが一番大事です。

それから、JSTのプロジェクトの立ち上げで難航したのは受け皿づくりでした。なかなかこれは難しい問題あります。

## 質疑応答

**質問者** 「地域づくりの視点と手法」のところで、産業論的アプローチという部分がありました。後ほど出てきていました小项目的な見方というのとあわせてですけれども、この西川町で「アケビへのこだわり」とありましたが、これはどういうこだわりなのでしょうか。

**大川** アケビ、ご存じですよ。大井沢の根子という集落に最初に行ったときに、学生たちを連れて行って調査をしたんですけども、食べる物がなくなっちゃって何か出してくれと頼んだんです。そしたら、大きなどんぶりに紫色の何か怪しげな物が出てきたの。学生は怖がって食べないから、僕がつまんでみた。そしたら、ほろ苦くて甘酸っぱい。アケビの皮のヤマブドウ漬けだったの。これはすごいですよ。びっくりしました。ところが、それは全然商品化されておらず、未だにしていません。最初は商品化したらどうだって言ったんですけども、これはしなくていいのかもしれない。わざわざあそこに行って食べるというのがいいのかもしれない。

それだけじゃなくて、山形県人はアケビを百何十%活用します。アケビというのは白い実には黒い種がありますよね。それを口にほおぼって、ペッペッと種を飛ばして、皮は捨てる。私は宮城県出身だからそうなんですけれども、山形の人とは違う。あの皮を干して、料理するときに戻して、そしてその中に肉を詰めたり、山菜を詰めたりして、干瓢で結わえてフライにしたり、天ぷらにしたり、煮物にしたりして食べます。それから、つる細工を作ったりします。ともかく、このアケビが私のこだわりの原点です。

あと、40年間通っていたのにこんなことも私は知らなかった、何のために調べてたんだとか反省したのは、ヤマブドウね。ヤマブドウの採取は期限が決まっていて、栗の木の花の最盛期の1週間だけだということです。私はつい最近このことを知りました。今までだれも教えてくれなかった。というのは、地域の人にとっては当たり前なんです。質問しなかったから教えてくれなかっただけのことなんです。365日のうち10日ぐらいしか採れないものを使う。これは何でかという、その時期のものは皮をはぎやすいんだそうです。

こういったことを始め、徹頭徹尾使える物を使います。それが民宿やなんかの食材に出てきたり、あるいはお土産品として売ったりしています。つる細工なんかは使えば使うほど光

沢が出てきていいものですよ。長くなるのでそんなことで。

**質問者** きょうの先生のお話は主に山村という視点からのお話でしたが、山村に限らず県内あちこちで人口減少が進んでおります。山というのは確かにそういう意味でいろいろ見るものがありますが、平地農村的な、ちょっとした里山のほか、田んぼや川といったものしかない場所では、先生がおっしゃる資源となるようなものがあるのかちょっと考えてしまいます。その辺りでアドバイスがあればよろしくお願いします。

**大川** 山形県だと、酒田の隣の余目町なんていうのは全くそうです。田んぼしかなくて、あとは最上川が流れているだけ。でも、あそこなんかはいろんなことをやっています。例えば、やはり米に自信があるもんだから米は徹底的においしい米をつくろうという努力をしています。確かに山村のようなバリエーションはつくりにくい。ただあそこの場合は、立派な米を作ると同時に、酒田や鶴岡に通って安定兼業しています。兼業のリサイクルをやろうとすればできる場所なんです。私は、リサイクルできればそれはそれでいいのではないかと考えています。

すべてが山村のような資源バリエーションがあるところだけではありません。しかし、どんな平坦部だって、食も含めて文化の歴史はあります。だから、そういった地域資源を徹底的に調べることです。しかし、わかったつもりで調査をすると何にも出てきません。視線を低くして、特にお年寄りに話を聞くことです。そして、それを今日的に使えるものに復興した方がよいものと、そのままのものがいい場合と二通りありますから。

余目だって、やはり米だけでは駄目です。何かプラスアルファがなければいけません。そのプラスアルファとして畑地や減反田んぼで何をつくるか。今山形で非常に伸びているのはソバです。今、自給率を上げています。減反田んぼにソバ畑が非常に増えてきているとはそういう意味です。

山形のソバのすごいところは、うまさのばらつきが余りないことです。アベレージを大体守っている。これはすごいです。

羽後町の場合は、あそこは山もあるので山村のたぐいだけれども、あそこで私が協力したものに「うご牛まつり」というのがあります。べこまつりと言ってるけれども。あのまつりは僕のアイデアです。

「羽後町には何にもなくて困った」と町長が言うんです。「西馬音内盆踊り」という国宝を持っているのに、何もないと言うから驚いちゃった。でも、それならばみんなで仕掛けたらどうだと提案したんです。ちょうど仕掛けたその年がうし年だったから、「牛まつり」なんかどうだと。そうしたら、町長始めみんないわく、牛肉の質は隣の村の方がいいと。だから、そんなこと言ってるからあなたたちは地域づくりができないんだと、頭数が一番多いというんだからそれで十分じゃないのと言ったんです。

そういったことで、べこまつりが始まりました。私は羽後町に運命で来たんだから、私が言うとおりに、肉質のいい隣の町には黙ってやれと言ったんです。それでやったら当たっちゃったんです。

そんなこと等々ありますが、ご質問の趣旨に十分には答えられていないですね。しかし、平坦部は平坦部でいろんなことをやっているところはあります。ただ、兼業で飯が食えるといったように、やはり条件に恵まれています。でも、別に自治体の中にこだわらなくとも、地域の外で稼いできたお金を地域のために、あるいは家族のためにどういう生かし方をするか考えるんでもいいと思うんです。そうでないと、住み続けていくための論拠が薄くなってくる。兼業の形がうまくリサイクルするとは限らないでしょう。次の世代でそれがちょん切れるかもしれない。だから、そこのところはかなり検討の余地があるかもしれませんね。